

雨乞〈あまご〉い（新宮町）

「大天道〈おおてんとう〉、大天道！雨を下され大天道！」

「ドンドコドン・ドンドコドン」

暑くらしい夏山〈なつやま〉の峯〈みね〉にこだまする声と音、遠望〈えんぼう〉（とおみ）するところ、旗〈はた〉、幟〈のぼり〉が風にはためき、若者たちが鉢巻〈はちまき〉に手甲〈てこう〉、脚絆〈きゃはん〉（手や足につける布）の勇ましい姿で山道を登っていきます。

「暑いのを！」

「ああ、苦しい！」

大干〈だいかん〉ばつ（ひでり）で、数十日の間、一滴〈てき〉の雨も降っていません。稲田の土が割れ、葉は黒ずんで、よじれてしまいました。きょうも、かんかん照りに、溜息〈ためいき〉ばかり。

お百姓〈ひゃくしょう〉さんの気持は、あせりと悲嘆〈ひたん〉（かなしみなげく）のあげく、大声で祈るひびきにも力が続きません。

播磨〈はりま〉・新宮〈しんぐう〉の里〈さと〉に市野保〈いちのほ〉という昔からの村があります。

ある夜〈よ〉「お玉〈たま〉ばあさん」に神のお告〈つ〉げがありました。

「雨を呼べ！祇園〈ぎおん〉さんの頂〈いただ〉から！」

「雨を下され大天道！」

山の峯々にこだまして祈りが続きます。すると、どうしたことでしょう。今まで雲一つなかった夏空にひとかたまりの黒雲が湧〈わ〉いてきました。

「おおてんと、おーてんとおー」

声がひとしきりはずみます。と、西北の天空に墨〈すみ〉を流したような雲、雲、とみるまに一陣〈いちじん〉の風が、さっと吹きおろしました。祇園さんの、そそり立つ岩はだが、

「ごごうーっ」

と鳴〈な〉りました。竜〈りゅう〉の吐〈は〉く火が雷鳴〈らいめい〉（いなづま）ときらめき、雹〈ひょう〉まじりの大粒の雨が若者たちの背中〈せなか〉をたたきつけ、滝〈たき〉のように流れました。水魂〈みずたま〉は断崖〈だんがい〉（切り立ったがけ）を下り、はるか麓〈ふもと〉に巨大〈きょだい〉い皿のような池を掘〈ほ〉りました。

「祇園さんに雲がかかると、きまって雷〈かみなり〉と大雨がくる。」

「大木を切ってしまうたから、今は祇園さん（岩山の頂〈いただ〉）に神をまつるほこら）にもうこない。」

など、新宮の村人は申します。しかし、皿池〈さらいけ〉の水は、稲田の真〈まん〉中に、こんこんと湧〈わ〉き出る清水となって、年中涸〈か〉れることがないのです。

「お玉の清水」と地元〈じもと〉では呼んで、酒つくりの水にも使われました。

